

# 村全体で手をつなぎ、地域の発展に活かそう。

## 鮫川村農村体験交流協議会(略称G T協議会)が発足

※G Tとはグリーン・ツーリズムの略。



設立会議の様子(7月10日)



①



②



③



④



⑤

これまでに村内の自然景観などの資源を活かし行なわれてきたさまざまな交流事業の例。  
 ①昨年の8月に東白川地方公民館連絡協議会などの主催により強滝を会場に行なわれた「森林教室」。  
 ②小学校で毎年行なわれている稲作りを中心とした農業体験。(写真は昨年の鮫川小の様子)  
 ③先月6日～7日に東京鮫川会の会員および鮫川ファンクラブのみなさんが参加したホテルツアーの一幕(山王の里での柏餅づくり)。  
 ④萩ノ沢・塩倉地区が進めている柿の木オーナーとの交流事業。(写真は昨年6月の竹の子祭り・自然薯植え付け祭りの様子)  
 ⑤先月12日～13日に開催した農大カレッジ講座。(江竜田地区でのヒノキ林の間伐の様子)  
 村農村体験交流協議会の発足により、これらの活動がますます活発に行なわれることが期待されます。

鮫川村には、地域の魅力を活かして都市との交流に取り組み集落やNPOなどの団体が数多くあります。また、自然体験活動や郷土史を教える優れた指導者もたくさんいます。平成24年には、全国の小学5年生を一週間程度農山漁村で宿泊体験させる『子ども農山漁村交流プロジェクト』がスタートします。この事業は、地域の経済活性化に大きな期待が寄せられており、村ではこの事業を受け入れるため、これまで個別に活動していたこれらの団体、指導者が連携して活動する組織『鮫川村農村体験交流協議会(略称G T協議会)』を7月10日に発足させました。

### ◆グリーン・ツーリズムって何？

グリーン・ツーリズムとは、農山漁村地域において、その地方の自然や文化、人々との交流を楽しむ

む滞在型の余暇活動をいいます。

ヨーロッパでは、農村に滞在しバカンスを楽しむといった余暇の過ごし方が一般的になっており、イギリスでは「ルーラル・ツーリ

ズム(またはグリーン・ツーリズム)」、フランスでは「ツーリズム・ベール(緑の旅)」、イタリアでは「アグリ・ツーリズム」と呼ばれ、国民に広く普及しています。

### ◆鮫川村のグリーン・ツーリズム(都市交流事業)の取り組み

本村のグリーン・ツーリズム(都市交流事業)は、昭和62年7月の東京鮫川会の発足を皮切りに、山村留学「竹飛歩学園」の開園、「鹿角平観光牧場」の整備、「高原の鮫川うまいもの祭り」の開催、民間の温泉旅館や農家民宿のオープンへと発展してきました。平成7年には都市との交流の拠点施設として、村営の体験交流型宿泊施設「ほっとはうす・さめがわ」が

高まっています。

### これまでに実施した交流事業の参加者の感想をお届けします。①

6月7日～8日に行なわれた「さめがわ・ふるさと体験学校」の参加者より。(詳細は先月号をご覧ください。)

### さめがわ・ふるさと体験学校の感想



東京農工大学農学部  
大学院生 山岸 祐介

「さめがわ・ふるさと体験学校」はふるさと暮らしを希望する人たちや、都市部の学生が、村の人たちと交流しながら村での暮らしを体験するイベントで、私は今回で5回目の参加となりました。初日は、山林に入っの間伐作業でしたが、チェーンソーの扱いは難しく、村の方の指導を受けながらもなかなか切り進めることができず苦労しました。指導してくださいました方々はいずれも山のプロフェッショナルで、切り倒す木の樹種や、その木が何に使われる木なのかというところまで説明していただきました。

この体験学校の良いと思うところは、こういった場面でただ作業を行うだけでなく、村の現状や、抱えている問題についても詳しく話をさせていただけるところだと思います。鮫川でのふるさと暮らしを希望する参加者にとっては、村の現状を少しでも良く理解することは大切です。また、学生にとっても間伐作業の大変さを体感し、こうした話を伺うことで、ただ楽しい、大変だ、だけではなくいろいろと考えさせられる部分ができて有意義だと思います。夕食は農村体験交流施設「山王の里」で、地元の方々と一緒に作りましたが、農家のお母さんたちは本当に手際が良く、世間話や冗談で笑いが絶えずとても楽しいひとときを過ごしました。食事は「山王の里」の管理に携わっている地域の人たちと交流しながらいただきましたが、人の出入りの激しい都会にはない、地域内の結びつきの強さを感じられました。

翌日は落合集落に移動し、田植えを行いました。作業自体は、学生のほとんどが以前にも参加経験があったためか、驚くほどの短時間で終了しました。お昼は落合集落の集会所でいただき、夕食、朝食とも普段では考えられないほどの量を食べていましたが、しっかり体を動かしたせいか、またおいしいご飯を大量にいただくことができました。

よく食べて、よく働いて、よく寝るのは人間にとって大切なことだな、と元気な村の皆さんと話しながら改めて感じるとともに、振り返ってみると今回も密度の濃い体験内容でした。体験を終え、何となく村の暮らしが身近に感じられるようになることが、この体験学校の魅力なのだと思います。

これまでに実施した交流事業の参加者の感想をお届けします。②

7月5日～6日に行なわれた大妻女子大ホタルツアーの参加者より

蛍ツアーの感想



大妻女子大学ライフデザイン学科  
3年 広川 彩乃

2回目の訪問となった鮫川村ですが、私は鮫川の虜になっていたの、また鮫川村を訪れること、蛍を観賞できることを楽しみにしていました。

実際に蛍鑑賞スポットに行く、予想以上の蛍の数と光の輝きにとっても驚き、興奮してしまいました。私の住む町の近くにもたくさんの蛍が見られるスポットがあるのですが、そこはその土地の持ち主の方が作った湿地環境であるため、鮫川村のような全くの自然の状態でたくさんの蛍が見られることはとても素晴らしいことだと感じました。街灯の電気ひとつ無い真暗闇の中に、小さな小さな緑色の光が等間隔にふわっと点滅する様子はなんとも幻想的で、あの世界に吸い込まれていってしまうような不思議な気分になりました。

次に農家への民泊ですが、私は農家のお家に泊めていただくということが初めての体験だったので、楽しい気持ちと少しの不安がありました。宿泊先のご夫婦はとても気さくな方たちだったので、不安も吹き飛んでしまいました。夜はご夫婦のご好意で晩酌会があったのですが、その席にさまざまな種類のお酒を出していただき、そのお酒を飲みながら家族のことや、村の自然や野菜のこと、村での暮らしのことなど本当に話が尽きなくらいたくさん話をしました。初めて出会った私たちを快く迎え入れてくださったご夫婦にとっても感謝しています。たった半日でしたが、何よりお二人の優しく温かな気持ちがうれしかったです。

翌日の朝は、早朝から始まる村の清掃活動のため早起きをしたので、眠い目を擦りながらの作業でしたが、早朝から外に出て新鮮な空気を吸い身体を動かすということはとても気持ちの良いことだと改めて感じ、とても清々しい気持ちになりました。作業後にいただいた朝食も本当においしかったです。鮫川村の野菜は都内などで売られているものと違って変な苦味や雑味がしないような感じがし、こんなにおいしい野菜を毎日食べられる村の人はうらやましいと思いました。今回は一泊二日の短い期間でしたが、日ごとの生活から抜け出すことができ、また、自然や人の温かみをたくさん感じる事ができた、とても充実したツアーでした。

特集  
村全体で手をつなぎ、地域の発展に活かそう。  
鮫川村農村体験交流協議会（略称G T協議会）が発足



中山間地域等直接支払交付金制度を活用した集落協定の活動では、地域の特色を活かし、交流活動やイベントなどを積極的に行なわれています。(写真は今年5月に行なわれた西山二区中山間交流実行委員会(集落協定)の馬込鮫川会との交流会の様子)

授業の一部として長期宿泊体験が義務付けられるものです。  
また、子どもたちを受け入れる市町村を全国に500か所作る計画も同時に決定し、この事業に国の予算を年間500億措置することとしています。この事業の受け入れは、地域の産業、経済の活性化とともに、教育・文化の向上や、鮫川村を訪れた子どもたちがやがて家族ぐるみでの交流に発展することも期待され、自立をめざす本村にとつては、これまでの経験を活かすチャンスでもあると考えら

れます。

◆協議会の活動内容は？

7月10日に役場正庁で行なわれた協議会の設立会議では、別表(右ページ)の団体・個人が参加し、村より設立趣意書、協議会の設置要領などが説明されたのち、満場一致で設立が承認されました。続いて、役員の選出が行なわれ、会長に進士徹さん(葉貫)、副会長に齋須寛一さん(新宿)が選ばれました。また、今年度の活動内

容としては、3つのテーマをもとに研修会を開催し、幅広い観光資源の発掘や体験プログラム・モデルコースづくり、参加者の安全管理法などを学ぶほか、受け入れ態勢の充実を図るため、情報の発信や体験指導者の育成など、構成員一体となって進めていくことが予定されています。  
この日は引続き、第一回目の研修会が行なわれ、教育旅行の第一人者で子ども農山漁村交流プロジェクトの推進検討委員を務めている小椋唯一氏(猪苗代町)を講師に

から注目を集めています。  
協議会の活動は始まったばかりです。自立の村づくりの展望を開くための一つの手段として、内外



東北観光推進機構・教育旅行アドバイザー(観光カリスマ) 小椋 唯一 氏

園の整備、有機の里づくりの推進のほか、落合や荻ノ沢・塩倉、鬼越・辺栗、中沢など集落ぐるみで都市交流事業や地域づくり事業に取り組み地域も数多く誕生するようになりました。  
一方では、「ホタルの里づくり」や「めん羊の里づくり」「桜・モミジの里づくり」など、中山間地域等直接支払交付金事業を活用しての地域の魅力づくりに取り組む集落も数多くあります。さらに、本村には自然体験における優れた指導者も多数おり、グリーン・ツーリズムを受け入れる潜在能力は、すでに他の市町村より高いものがあります。

◆「子ども農山漁村交流プロジェクト」がはじまる

現代は、食糧や環境、エネルギー問題が深刻な事態を迎え、「大量生産」・「大量消費」・「大量廃棄」型社会からの一日も早い転換が求められている一方、核家族化の進行や地域の絆が懸念されるな

ど、人間関係の再生も社会的に大きな課題になっていきます。  
このような中で、豊かな里山の環境が残り、安全な食糧を生産することができ、また、多世代家族や集落共同体を有する「中山間地域」に評価が高まり、国民の関心も年々高まりを見せています。  
政府は、昨年末、平成24年度か

ら全国の小学5年生(およそ120万人)を対象に、一週間程度農山漁村で宿泊体験することを義務付けた『子ども農山漁村交流プロジェクト』の実施を決定しました。これは、農山漁村での宿泊体験と農山漁業体験活動が、子どもたちの感受性や生きた学力を育てること

別表 「鮫川村農村体験交流協議会に加入した団体・個人」

所属名	代表者などの氏名	備考
NPO法人あぶくまエヌエスネット	進士 徹	会長
NPO法人明日飛こども自立の里	清水 国明	
落合里づくり協議会	本郷 公市	
さめがわライフサポート	蛭田 晃	山王の里管理者
春りんどうの会	関根 成男	荻ノ沢集落
菅生の郷自然学校	鈴木 一	ふくしま・もりの案内人
ふくしま・もりの案内人	齋須 寛一	副会長
ふくしま・もりの案内人	水野 春雄	
ふくしま・もりの案内人	三瓶 稔	
古文書を読む会	青戸 良一	
村商工会	早川 正博	
J A東西しらかわ鮫川支店	鈴木 市恵	
村交流施設「ほっとはうす・さめがわ」	小松 毅	
村農産物加工・直売所「手・まめ・館」	本郷まさ子	
村農林課	山形 賢一	
村企画調整課	鈴木 治男	事務局